

の土地、国破れても安心のできる母国、哈爾濱をたつてから四十二日の長い長い道中でした。

終戦から五十三年、若かった私自身が七十七歳となりました。あの時、肌身離さずに満州から持って帰った満鉄の「身分証明書」と引揚げの時に渡された「引揚証明書」は、遠く海外から引き揚げてきた苦難を語る歴史の証しではないでしょうか。

## 私の引揚記

神奈川県 中塚 幹子

あこがれの満州へ

私の家族が初めて満州に旅立ったのは、満州事変直後の昭和八年の春でした。父は、当時大阪鉄道株式会社（近鉄の前身）の社員で、土木建設技師として鉄道敷設関係の仕事に従事しておりましたが、もっと自分の持っている技術力を生かせる仕事をしたいと日々考えていたようでした。たまたま、満州国の鉄道建設の

ための技術者招へいの話があり、これは自分の希望にぴったりだということで、一大決心のもと一家を挙げて、満州に赴任することとなったのです。

勇躍、神戸港から大連に向かつての船旅を開始しました。大きな船でしたので瀬戸内海は静かに過ぎましたが、名にしおう玄界灘に差しかかったころから時化がひどくなり、船酔いで苦しんだことを臙気ながら思い出します。

父は大連に着いてすぐに、南満州鉄道の技術社員として活動を開始しました。その時、私は五歳になったばかりでしたが、子供心にも満州の広さにはびっくりしたことを思い出します。

父は、その仕事柄から北滿一帯に出張することが多く、留守がちの毎日でしたから、母は私と、私よりも三歳年下の弟との二人の幼い子供を抱えて、家事をきりもりしていました。まだ周囲の環境にも十分慣れていない大連の社宅で、夫の留守を守っての生活は、さぞ大変だったことと思います。しかし、日時がたつに従って生活にも大分慣れて、小さい二人の子供を連れ

て、あちらこちらと遊びに出かけるようになりました。夏は星が浦や静が浦の海水浴場に行ったり、冬は大連市内のスケートリンクに連れて行ってくれたりしたものです。

そのころはまだ、満州国も建国早々のこととすべての面で不安定な状況であり、必ずしも治安良好ともいえませんでした。特に北滿の奥地では治安が極度に悪く、至るところで馬賊や匪賊が横行しており、ソ満地帯の国境警備に任じている日本軍や、滿蒙開拓のために入植している開拓団の生活地にも、度々襲撃して犠牲者を出していることが、毎日のように伝えられていました。仕事の関係から治安の悪い所に出掛ける父は、いつも護身用のピストルを持っていたそうです。しかし当時の大連は、明治の後期から日本の租借地として統治されており、貿易港として大陸への門戸のような重要な所で、治安も確立しており、経済的な発展も活発で、美しいアカシア並木の街並みは帝政ロシア時代のままのモダンな所でした。既に三越デパートもありました。小さいときからデパートに行くのが好

きだった私は、よく母にねだって連れていってもらいました。

#### 平和な満州での生活

大連に来て二年がたち、私は聖徳小学校に入学しましたが、父の転任に伴って奉天（現在の瀋陽）の平安小学校に転校しました。しかしそこも一年ぐらいで、あまり思い出に残ることもなく、斉斉哈爾に移りました。

斉斉哈爾の信永小学校には、四年生から六年生の二学期まで在校し、友達もたくさんできて一番思い出の多い学校でした。斉斉哈爾にいた満鉄の日本人社員の子女は、ほとんどこの信永小学校で学んでいました。日本から遠く離れている子供たちに、祖国日本を忘れさせまいとする心遣いからか、三月三日のひな祭りには、講堂に立派な「おひな様」を飾り遊戯したりしました。夏の夜には校庭に櫓を組んで盆踊りをし、父兄も一緒に踊ったものです。また、秋になるとお月見だんごを作ってお供えして、お月見に一夜を過ごしたり、冬には校庭にできたスケートリンクで、縦

横無尽に氷の上を走り回ったりしました。楽しかったことがいっぱいあり、今でも当時の小学生生活が一番懐かしく思い浮かびます。先生や父兄などの大人たちも、望郷の念から子供たちよりも楽しみにして、これらの行事を迎えていたのではなかったかと思えます。

特に、冬は十月から四月まで校庭がスケートリンクに早変わりして、体操の時間はもちろんのこと、昼休みも放課後もすべてスケートでした。夜は夜で、野球場などの広場がやはりスケート場となり、夜間照明の設備もあるので、夕食後は父に連れられて寒さもものはと滑りに行ったものです。そのおかげで今でもスケートには自信があり、機会があれば滑りたいと思うぐらいです。

そのほか、誕生日には親しい友達を家に招待して食事をしたり、ゲームをしたりしました。終戦そして引揚げのあの悲惨な事態が起きた満州とは、まったく別世界の平和な満州でした。

五年生のころ、斉斉哈爾放送局の全国向け（日本を含めて）の子供番組で、連続物語の朗読に出演したと

き、アナウンサーのおじさんとすっかり仲良くなり、将来はアナウンサーになればいいとおだてられて、その気になったこともありました。

休日には家族と馬車（マーチョ）に乗って市街に食事に出掛けることもありました。また、父が満鉄社員でしたので社員バスを利用して、ゆったりとした一等車に乗って二つか三つ先の駅まで行き、戻りの汽車で帰ってくるということもしました。二つ、三つ先の駅といっても、ひと駅行くのに三、四十分はかかるのですから、ちょうど今の時代の郊外へのドライブといったような感じだったと思います。春には駅を出ると数分もしないうちに見渡す限りの草原となり、そこには、ゆり、鈴蘭、芍薬、牡丹……とあらゆる美しい花が咲き乱れ、そのなかに美しい羽を飾った雉子の姿も見受けられました。夏には地平線のかなたに、タライほどの大きな夕陽が、真っ赤に空を染めて沈む光景も度々見ることができました。満州平野の風景は、筆舌に尽くし難いほどの美しく雄大な眺めでした。大陸性気候のため夏は涼しく冬は大変な寒さでしたが、家の中は

スチームで暖をとり二重窓だったので寒さ知らずでした。

しかし、一方では東洋平和に段々と暗雲がかかり始め、支那事変がぼっ発しその解決が図られないうちに、滿蒙国境におけるノモンハン事件が起きました。齊齊哈爾にあった日本軍の陸軍病院にも、大勢の負傷した兵隊さんが入院しており、当時の小学生の一つの務めであった慰問にも、クラスの友達と度々行ったものですが、この平和に毎日を送っている私たちの住んでいる世界とは、まったく別の世界のこのような気持ちになつていたと思います。

#### 日本への一時帰国

六年生の二学期になって、私の高等女学校への進学の問題が起きてきました。父や母の考えは「日本人はやはり日本の国で教育を受けさせたい」ということでした。滿州の学校でも、先生は日本からきているし、教科書なども日本の学校のほとんど同じでしたが、父母はやはり昔の日本人の気質を持っている人でしたので、日本での教育を強く希望しました。

多くの友達と別れて、日本に帰ることとなりました。楽しく過ごした信永小学校を離れることは悲しいことでしたが、クラス全員に齊齊哈爾駅まで見送ってもらいました。大人になったら、また戻って来ることを誓いました。私は滿州が大好きでした。もちろん父は仕事がありますので滿州に残ることとなりました。さしずめ今でいう単身赴任ということになったわけです。

母は、滿州にきてから生まれた二人の妹とともに、四人の子供を連れての長い旅で、さぞ大変だったことと思います。母の実家の奈良に落ち着きました。そして翌年の四月に、母の母校でもあった奈良女高師の付属高等女学校に無事入学することができました。

女学生生活も平穩なうちに過ぎていきましたが、一年生の冬に、大東亜戦争が起きました。大変な世の中になったものと、家族で話し合っていました。滿州がどうなるのかなどということは、まったく考え及ぶもつかないことでした。父も元気でなに不自由なく暮らしていて、度々飛行機で帰ってきました。日本内地よりも平穩な生活をしていたようです。

そのうちに、学校の授業においても英語の時間が無くなり、日常生活からも横文字は一切使われなくなりました。音楽の時間も今までの「ドレミファソラシド」が「ハニホヘトイロハ」の音階に変わり、初めは随分と悩まされたものでした。

三年生になると、農繁期には県内の出征兵士の家で手不足の農家に勤労奉仕に行き、慣れない手つきで稲刈り稲こきなどをしました。またそのうちに、学徒勤労動員令が発令されて、学校も軍需工場となり、奈良市内に住む生徒の家からミシンを運び、陸軍の野戦用の蚊帳を一日中縫い続ける毎日となり、勉強もほとんどできなくなりました。

西の空に沈む夕陽を眺めては、あの斉齊哈爾の広野で見ていた真っ赤な太陽を思い出して「ああ、満州にいた方がよかった」と思ったことも再三でした。後に避難行のときに、日本に帰りたいと思っていた望郷の念とは反対に、このときは満州への望郷の念に浸ったものでした。

昭和十九年の暮れからは、この奈良にも空襲警報が

発せられるようになり、正月になるとその回数も増えてきました。その当時、奈良・京都には絶対に爆弾は落とされないとゆうわさが流れていましたが、それでも心配で着のみ着のままです寝るようになりまして、食糧事情も急速に悪くなってきました。

それにもまして、満州の父との文通もままならぬようになってきましたし、家族の心配は増すばかりでした。母は、このままではお互いの生死も分からなくなるのではないか、生き別れになるかもしれない、というように考え始めました。そしてこのまま一生、互いに安否を気遣いながら暮らすのはいやだ、いっそのこと父の元に帰りたいと、再び満州に行く決心をしました。母からは「小さい子は連れて行くが、あなたは奈良に残って上級学校（今の大学）に行つて勉強をするかどうか、判断はあなたがしなさい」と言われました。私は進学のための受験準備をしていましたが、「私一人ここにいて、たとえ生き残ってもまた空襲で死ぬことがあってはいけません。三月には女学校を卒業できるので進学はあきらめます、後悔しません」と約束しま

した。母も、戦時下四人の子供を全部連れて父の元に行くことは、心身共に大変なことだったと思います。

再び懐かしの満州へ

昭和二十年の四月末に、敦賀から朝鮮の清津に渡り、図們から鉄道で国境を越えて、斉斉哈爾から北に約一時間の寧年という町の父のところは無事に着きました。当時、父は寧年の杜宅におりました。既に敦賀・清津間の船旅でも、アメリカの潜水艦の攻撃や、空からの爆撃で安全ではなく、そのため船もいつ出航するのかわからない状況で、危険は覚悟の上の渡満でしたが、夢にまで見た満州の地に降りたときは本当に嬉しく、父も家族の元気な姿を見て大変に喜んでくれました。五年ぶりに、第二の故郷のような懐かしい満州に戻りましたが、まだまだ前と変わらず、のどかで戦争の影もありませんでした。奈良での生活がうそのようでした。父と一緒に暮らすためとはいえ、あの苦しい生活の日本を離れて、こののどかな地に来たということ、日本にいる人々になんだか申し訳ない気がしていました。家族ともよくそのことを話し合っていました。

私は、奈良で女学校を卒業していましたので、母と一緒に毎日家におりましたが、中学三年生になっていた弟は、六月初めから七月末までの二カ月間の予定で、斉斉哈爾から北へ約一五〇キロメートル離れた訥河の開拓団に、学徒勤労奉仕隊として学級全員で出掛けました。これは、在満日本の中学生として内地の中学生と同じです。

訥河開拓団は、福島県からの入植者が主力だったようです。学生たちは牛の乳搾りと、家畜の飼料となる野草の刈り入れが主たる作業であったようです。一畝を一往復するのに半日はかかったという広大な畑で、日本では想像もつかないことです。電気も水道もなく、夜は石油ランプで明かりをとり、生活用水は井戸からつるべで汲み上げるような生活でした。当時の開拓団の人々は、こんな生活環境の中で、国策であった開拓事業に精魂を尽くしていたのです。夜になると狼の鳴き声がすぐ近くで聞こえて、不気味な思いをしたそうです。弟がそんな生活をしているときに、私たち家族は相変わらず、平和であり不自由のない日々を過ご

していました。

この平和な生活も、八月九日、満ソ国境からソ連軍の不意の侵入で、一場の夢と潰<sup>つぶ</sup>えてしまいました。幸いに弟も勤勞奉仕が一時休暇で、家に帰っていました。もし、勤勞奉仕がもう少し続いていたら、弟とは別れ別れになり再び会うこともなかったかもしれない。あるいは開拓団の家族と運命を共にしていたかもしれない。弟に強運があったのか、いずれにせよ、神の恵みによりわが家では、家族がバラバラになることを避けることができました。

満鉄の社員・家族のなかには、この時点でもう両親・兄弟・親子などが離ればなれになってしまった家族が多くありました。その後いろいろな悲劇的なことが起きました。その悲劇はすべて八月九日のソ連軍の突如とした越境、侵入で始まったのです。

北満の国境周辺にいた満鉄社員・家族も、着のみ着のままです。持てるだけの荷物を持って、齊齊哈爾に向かって特別列車を仕立てて下ってきました。私たちも、ここにいつまでもいるのは危険だということで、列車を仕

立てて、まず四平街に疎開するということになりました。ソ連軍が侵入してきても、日本の精強な関東軍がいるので、そのうちに態勢を立て直して必ず反撃に転ずるから、それまでの辛抱ということで四平街に疎開する、という認識でした。すぐにまた寧年に戻れるというので、荷物も必要最小限にまとめて各人が持ち、準備された列車に乗って齊齊哈爾まできて、四平街行きに乗り継ぐため駅構内で待機をしていました。

#### 終戦の玉音放送を聞く

齊齊哈爾駅構内で待機中に、終戦の玉音放送を聞きました。あまりはつきりとした内容は聞き取れませんでした。が、「忍び難きを忍び……」というようなお言葉が聞こえていました。一瞬、私も自分の耳を疑ってしまいました。確かにそのような意味のお言葉でした。聞いていた人たちもみんな、茫然とした様子でその場に座り込んでいました。

そのうちに段々と気持ち落ち着き、「ああ！ 日本は負けたのだ、戦争が終わったのだ。さて、これからどうなるのか！」と思いました。構内にいた、満ソ

国境に向かう関東軍の兵隊さんたちは、玉音放送を聞いていなかったようで、私たちが「戦争は終わった、いま天皇陛下のお言葉があった」と知らせても、「デマだ！ そんなデマに惑わされてはならぬ」「日本が負けるはずはない」と半ば憤慨しながら、到着した軍用列車に再び乗って北上して行きました。あの兵隊さんたちは、その後どうなったかと時々思い出します。正確な情報が正しく上官から伝わっていたら、シベリア抑留などというむごいことも少なくて済んだのではないでしょう。あの齊齊哈爾駅構内での様子は私の脳裏に深く焼き付いており、八月十五日を迎えるたびに髣髴として浮かび上がってきます。

### 寧年での悲惨な生活

終戦になったので、四平街に疎開する必要も理由も無くなり、元の生活拠点である寧年に戻りました。しかし、終戦を境にして、以前は平和で穏やかな所であった寧年の満鉄社宅周辺も、一転してもう安住の地ではなくなりました。満人たちが暴れ始めたからです。略奪・暴行などが至る所で起き、治安が極度に悪くなり、

とうとう日本人は一カ所に集まって生活する方が安全だということで、町中にあった病院に移るようになりました。

しかし、その病院が安住の地であったのはほんの短い期間で、寧年の町に進駐してきたソ連兵が、毎日のように小銃を構えながらどこからともなく現れるようになりました。

その行動は、見回りと称して日本人のいる所を探し、若い女性を求めるとの行為であることがすぐに知れ渡りました。ソ連兵の乗ったジープが現れたら見張りの人がすぐにみんなに知らせ、女性を物置の隅などに隠し、その上に机や椅子を雑然と積み上げて外からは分らないようにしました。またときには、床のアンペラをめくり、床板を外してその下に腹ばいになり、アンペラを元どおりにして隠れることもしました。それが毎日のことようになってきました。

そのうちに、何度見回りにきても若い女性がいなくて不審に思うようになったのか、ある日、突然に数人のソ連兵がやってきて男性を全部外に出し、家の中

に入り各部屋をひとつずつ探し始めました。若い女性は例のとおり物置や床下に隠れていましたが、幸いにもそのときは見つかりませんでした。それから後は、

このままではいつか見つけれられるであろうと、私たちは国防色の服を着て、頭を短く刈り、人によっては七・三に分けていつも男性と一緒に行動するようになりました。その結果、若い女性の姿は見受けられなくなり、ソ連兵もげんな顔をしていました。

こうなるとソ連兵と私たちの知恵比べです。私たちはソ連兵の目をごまかし女であることをなんとか隠すように、いろいろと知恵を絞りました。ソ連兵は段々と疑惑の目を深くし、家探しもしつこくなり、一度探したところを二度も三度も足を踏み入れるようになってきました。そんな日が幾日か続きました。

ある日、ソ連軍の司令官が自ら出向いてきました。そして「近日中に日本に帰れるようになるので、その事前調査にきた。ついては列車に乗る人の数を調べたいので、一家族ずつ自分の前に出で並ぶように」との指示でした。私たちは、その言葉を真に受けて、ここ

に取り残されては大変だとばかりに、いわれるままに一家族ごとに司令官の前に出で並びました。最初の数を、当時責任者だった父はそれとなく見ている様子、となく司令官のしぐさに疑問を持ち、私の家族からあとの人たちに「とにかく、他人の幼児を借りてでも人数だけは合わせて、若い女性などは絶対に司令官の前には出さないように」と、口伝えて申し送りました。

人数は合わせておかないと、万一本当に帰国ということになったときに、また騒動のもとになることを恐れたのでした。しかし、やはり父の勘はずりでした。司令官は帰るときに、司令官の目にとまった女性を名指しして、その夜ジープに乗せて連れて行ってしまいました。

その後、名前を覚えられた彼女たちは、齊齊哈爾に移るまで何度も呼び出されていたようです。彼女たちは不幸にも犠牲者となってしまったのです。父の判断がなかったら、私を含めてもっと多くの人がこんな忌まわしい目に遭っただろうと、あのときのこと

を思いだすと、背筋にぞーっとした悪寒が走るようです。そして、年頃の娘を持った両親の心配は並大抵ではなかったと思います。

### 齊齊哈爾への集団移動

昭和二十年の秋も深まり、寒さがひしひしと身に迫ってくるようになつたころ、寧年から齊齊哈爾に集団移動をすることになりました。もう寧年には戻ることがないので、ある程度荷物を整理し、これからの避難生活に必要な衣類・食料・お金などを持てるだけ持ったの移動でした。

齊齊哈爾では、地元の満鉄社員の人たちがいる社宅に入り、居候のような格好で共同生活をするようになりました。こうして約一年間の齊齊哈爾での生活が始まりました。

日がたつにつれて、売り食いする人や行商をする人が段々と増えてきました。終戦前、四平街に疎開するときに相当用意していた持ち金も減る一方でした。満鉄は、社員数万人のマンモス企業でしたので福利厚生

の面でも充実しており、当時日本内地の大企業でもあまり普及していなかった社内預金という制度があり、満鉄内では必要によりいつでも引き出すことができましたが、終戦になってそれも凍結されて、減る一方のお金に両親もさぞ心細い思いだったことでしょう。

私も両親にばかり苦勞をかけることもできず、何か働かなければと考えていました。働くといっても、私にできることは知れていましたが、一番簡単なのは行商だと考えました。関西にいたときお好み焼きが好きで、よく食べていましたので、あれだと思いお好み焼き屋をすることにしました。材料は満人の店から分けてもらいましたし、鉄板は父が鉄道の工場から廃材の鉄板を持ってきました。まず家で予行をしましたが、おおむねおいしくできましたので、いよいよ街路上に出店を開きました。お好み焼きは、日本人の社員や家族の人には懐かしい思いをさせたのか、作る前から行列ができるくらいでしたが、七輪二個に火を起し鉄板を乗せてもなかなか鉄板が熱くなりません。薪をどんどんくべるのですがそれでも駄目でした。そのうちに並んでいた人は一人減り二人減りしていきました。

まったく泣く思いでした。寒い北満の冬は零下三十度から三十五度に下がり、マスクをしていて鼻息がまっげに付くと、上下のまつげがまばたきによってひびついて凍ってしまいます。馬の鼻息が鼻からつららになって伸びるのですから、露天でのことなので鉄板が熱く焼けないのです。このことは全然頭に入れていなかったことで、完全に失敗でした。

次に考えたことは、水あめ売りでした。砂糖の代わりに水あめはいろいろなところに使われていたので、社宅でも売れるのではないかと思っただけです。これも満人の店で事情を話して安く分けてもらい、それをつてんびん棒で担ぎ、社宅を一軒一軒回り「水あめはいりませんか？」と言いながら売り歩き、一斗缶（石油缶）からひしゃくで汲んで、計り売りから始めました。初めてのことでなかなか上手には売り込めずじまいでしたが、そのうちに、段々と得意先ができて、面白いように売れました。後には古いリヤカーを買ひ、石油缶を四個乗せて、「桃太郎」というのぼりを立てて売りに出ました。信永小学校に在学していた時、学芸会で

弟が桃太郎役をやったことを思い出して屋号のつもりでのぼりを作りました。弟が手伝ってくれて、そのうちに父も手伝ってくれましたので、一日に四、五缶も売れることがありましたが、儲けは知れたものでした。しかし両親の苦勞を少しでも軽くしているという気持ちと、生まれて初めての商売ということで、むしろ張り切っていました。そのうちに、ソ連軍が移動し八路軍が入ってきましたが、治安は一層悪くなり、夜間などは外に出るといふことなど絶対に駄目でした。

今まで日本人に対していろいろと反感を持っていた人々が、日本人や戦前に日本に協力していた満人などを次々に告発して、人民裁判と称して街中を引き回したり、民衆の面前で暴行を加えたりし、揚げ句の果てに広場で一方的に罪状を訴えられて、そのうえで銃殺されたということが頻繁にあったようです。満鉄社宅の人々も、自分たちには直接関係はないと思う一方で、戦々恐々とした日を送るようになりました。八路軍と国民党軍との市街戦もあり、目の当たりにその恐ろしさを体験しました。

八路軍と国民党軍とが、お互いに勢力争いをしていくうちに、治安の方は少しずつよくなり落ち着いてきました。流通貨幣の変動は相変わらず激しく、一夜にして使えなくなったり、価値が下落したり、数種類のお札が流通したりしていました。お金が原因で自殺する人も出る状況でした。

#### 帰国への旅

昭和二十一年の夏も終わりに近づいたころ、やっと待望の帰国の話が出ました。今度こそ間違いなく帰れるとのことでしたが、実際に行動が起きるまでは半信半疑でした。

齊齊哈爾の駅には、あちらこちらから避難生活をしてきた人々が集まってきました。着のみ着のまま、それこそ乞食のような格好をした人々、奥地の開拓団から毎日毎日歩いてここまでたどり着いた人々があふれるようになりました。この人々もいろいろな悲劇を背負って、ただ日本に帰り着くまでは死ねないという気持ちだけが支えになって、ここまで来たのだと思えました。話によると、避難するのに幼い子供たちが足手

まといになり、集団に迷惑をかけるということで、学校の講堂に集めて先生が話をしているうちに周囲から火を付けて全員を焼き殺したとか、長い行程で歩けなくなった年寄りや病人を、その背後から銃で撃ったというような、身の毛もよだつようなことが実際にあったとのことでした。私たちが齊齊哈爾で苦勞したことよりも、もっともつと悲惨な苦勞があったことを知り、私たちの境遇に感謝したものでした。

実際に私たちが帰国の旅に出発したのは、九月の半ば過ぎだったと思います。やっとの思いで乗った汽車も、途中から無蓋車に変わったり、それはまだよい方でフラット車（平らな鉄板だけの囲いのない貨車）や石炭車（底が傾斜している貨車）など普通は人間は乗らないような貨車になったりで、全くひどいもので危険なものでした。

トイレなどはなく、男も女も連結器にまたがって用を足したり、列車が一時停止したときを利用して、くもの子を散らすように野原に飛びおりて用を足す有様でした。

途中で馬賊や匪賊に襲われると、まず最初に女・子供を隠し、男の人が貴重な持ち金を少しずつ出し合つて相手に渡し、なんとか列車が無事に動くように工作をしていました。あるところでは、国共内戦のため橋が破壊され、何キロメートルも歩いて河を渡つたこともありました。

やつとこのことで新京を經由して奉天に着きました。奉天駅は引揚者でいっぱいでした。壺蘆島に集結するための列車に乗るのには順番待ちで、町上場のコンクリートの床で寝起きをしました。アンペラを敷いた床は冷たく、高粱粥で過ごす毎日は何ともつらい日々でした。

ここは、あちらこちらから集まった引揚者でごった返していて、やつとたどつた安心感からか、それとも長い旅の疲れからか、命の尽きた方も大勢出ました。ここまで頑張ってきたのにと胸の締めつけられる思いで過ぎしました。

やつと錦州に向かって列車に乗りましたが、錦州でも数日間足止めされました。しかし、もうこのころは

日の前に日本があるような気持ちで、苦勞も苦勞になりませんでした。壺蘆島からは、上陸用舟艇で佐世保に向かいましたが、艇内では戦後すぐに流行したという、並木路子さんの「りんごの歌」が何回も何回も流されていたことが、とても印象的でした。

#### 生活再建への道

やつと佐世保に上陸することができました。今日まで、このためにあらゆる苦勞に耐えて生きてきた日本への帰国が、やつと現実のものとなったのです。何もかも失った私たち一家ですが、家族が一人も欠けることなく無事に日本の土を踏むことができたのは、不幸中の幸いで有り難いことです。思い返せば齊齊哈爾を出発してから約四十五日の長い長い旅でした。佐世保に上陸したときは自然に涙がこぼれ落ちました。

持込み許可の一人千円を持つのがやつとでした。私の背負っていたリュックサックの中も、めばしい物はすべてとられて、ただ草履一足だけが残っていました。どうして草履が残っていたのか、その訳は今でも分かりません。

佐世保上陸後、検疫が行われました。その後岸壁の屋台で、家族そろって熱いうどんを食べたときの味は、忘れられません。これこそ日本の味だったのです。夢にまで見た奈良の家に着いたときには、思わず玄関にへなへなと座りこみました。

奈良では、両親をはじめ親族その他の方々の温かい懐の中で生活することができ、今日まで幸福に過ごせたことを感謝するのみです。

あの悲惨な逃避行で、日本の土を踏むことなく亡くなられた多数の方々のことを思うとき、断腸の思いで胸が詰まります。

戦後五十余年、もはや戦後ではないと言われる時代においても、まだ中国残留孤児の話を目にするとき心が痛む思いです。この気持ちは実際にあの苦労を経験した人でなければ分からないことです。

日本は現在、平和・飽食の時代と言われていますが、まだ世界のどこかでは争いごとが絶えません。世界から争いが無くなり、人々から悲しみ苦しみが去って、初めて世界平和がくるのです。果たして、いつその日

がやってくるのでしょうか。

## 黄塵万丈の蒙古風に吹かれて

神奈川県 藤井彰治

心に刻まれた深い傷

戦後五十余年もたち、終戦当時とは、文字どおり隔世の感がある現在、おぼろげな記憶をたどってみると、あの終戦当時の絶望感と苦難な引揚げ、そして生活再建への荊いばしの道など、今も心に刻まれた深い傷がある。それらを回顧することは、あたかも死んだ子供の歳を数えるようなもので、うたた今昔の感に堪えないものがある。

本当は、今更ながらだれにも話したくない気持ちである。しかし、それが自己の過去における生活の真実であり、民族の語り継ぐべき歴史のひとつであるとするならば、後世への語り草としてあえて筆を執った次第である。